

お盆（盆供養）は、西日本では、新暦八月十五日に月遅れ盆を行う所が多い。しかし、東日本では、旧暦の日付を新暦に置き換えて七月十五日に行う所が少なくない。

これは『孟蘭盆経』によれば、釈尊の弟子の目蓮が、餓鬼道に堕ちて「倒懸」の責め苦に喘ぐ亡き母を救うために、七月十五日、ご飯とお菓子をお盆に載せて供養したことに始まるという。それが日本にも伝わり、すでに斉明女帝五（六五九）年七月十五日の詔で「京内の諸寺に於いて孟蘭盆経を勧講し、七世の父母に報せしむ」と布告され、朝廷でも長らく恒例仏事として行われてきたのである。

しかも、このウラボンの語源については、イラン語で死者の魂や穀物の霊をさす *Urbān* に由来するとの説がある。また、民俗学者の柳田国男氏などによれば、旧暦（太陰太陽暦）の正月十五日と七月十五日は、一年の前半と後半とに初めて満月の出る好日であり、古くから祖先の御霊祭が行われてきたという。それゆえ、わが国のお盆は、単なる施餓鬼供養でなく、むしろ御彼岸会のような先祖供養の意味合いを含んでいる。

この七月十五日の前後三日間、賑やかに「みたま祭」を行っているのが、東京の靖国神社である。そのスタートには柳田国男氏の功績が大きい。氏は、昭和二十年八月の大戦終結間際に満七十歳で『先祖の話』を書きあげ、「国の為に戦って死んだ若人（ほとんど未婚）だけは、何としてもこれを仏教徒のいふ無縁ほとけの列に疎外しておくわけにいくまい」と考えていた。その矢先、柳田氏は靖国神社の若い神職 S 氏から、お盆の古俗により英霊を慰めるため「みたま祭」ができないかと相談を受けた。そこで、柳田家ゆかりの長野県遺族会有志などに呼びかけて、翌年七月、靖国の境内において催された文化講座で「氏神と氏子」について講義した。これが機縁となり、翌二十二年七月から、千代田区民などの協力を得て、現在のような「みたま祭」が正式に発足したのである。

この祭は、十三日の前夜祭から始まる。参道の両脇に所狭しと掲げられる数千個の献燈が、多彩な露店や浴衣姿の若者や子供たちを照らし出す。

特に今年は、境内にある「遊就館」と称する荘重な博物館の大々的な増改築が完成し、十三日にオープンする。続く三日間には、例年以上の人数が境内を埋め尽くし、それ自体が若くして国に殉じた英霊たちを慰め和ませることになろう。

ちなみに、私は南方で戦死した父が祀られている関係から、一昨年『ようこそ靖国神社へ』（近代出版社）という公式ガイドブックを編集し、また今夏『靖国の祈り遙かに』（神社新報社）という戦跡慰霊紀行文集を出版する。その一端は後日この欄で紹介させて頂こう（19話参照）。